



特集 教皇フランシスコ訪日と核廃絶 —「あなたのうちに平和があるように」

教皇フランシスコ核問題発言への反響

■ 光延一郎（日本カトリック正義と平和協議会秘書）

昨年訪日された教皇フランシスコは、その巡礼者としての目的を次のように語られた。「わたしはつつしんで、声を発しても耳を貸してもらえない人々の声になりたいと思います。現代社会が直面する増大した緊張状態を、不安と苦悩を抱えて見つめる人々の声です」（2019年11月24日広島市の平和公園にて）。

その通り教皇は、苦しみや試練に遭う人々に寄り添う姿を示された。そこで核兵器、死刑、難民受け入れ、競争社会や効率主義の行き過ぎ、若者への共感、原発などについて、明確なメッセージを送られた。それは一般メディアでも大きくとり上げられ、多くの人々が、政治におい

て「理念」を語ることの意味や、教皇が平和という究極のモラルに向き合い、誰にも付度せず、まっとうな主張を堂々と説いてまわることに強い印象をもったようだった。

核兵器廃止について

教皇は特に核兵器問題については、強くはっきり語られた。長崎の爆心地公園では、「軍備拡張競争は、貴重な資源の無駄遣いです。…武器の製造、改良、維持、商いに財が費やされ、築かれ、日ごと武器は、いっそう破壊的になっています。これらは神に齒向かうテロ行為です」。「カトリック教会としては、人々と国家

間の平和の実現に向けて不退転の決意を固めています。それは、神に対し、そしてこの地上のあらゆる人に対する責務なのです。核兵器禁止条約を含め、核軍縮と核不拡散に関する主要な国際的な法的原則に則り、たゆむことなく、迅速に行動し、訴えていくことでしょう」。

広島平和公園でも、「確信をもって、あらためて申し上げます。戦争のために原子力を使用することは、現代において、犯罪以外の何ものでもありません。人類とその尊厳に反するだけでなく、わたしたちの共通の家の未来におけるあらゆる可能性に反します。原子力の戦争目的の使用は、倫理に反します。核兵器の所有も倫理に反します。それは、わたしがすでに2年前に述べたとおりです」。

教皇メッセージの反響

教皇の踏み込んだメッセージに呼応して、日本カトリック司教協議会からも、高見三明大司教名で、2019年12月12日、安倍首相宛てに次のような要請がなされた。「被爆者をはじめ国内外の無数の人々は、唯一の戦争被爆国である日本が核兵器廃絶に関して国際社会をリードすることを期待しています。それに応えるためにも、『核兵器禁止条約』への署名および批准に対してご英断を下されるよう要請いたします」。

また、米国カトリック司教協議会の国際正義と平和委員会議長デイビッド・J・マロイ司教からも2019年11月25日に声明が出された^{*1}。その内容は、米国の司教協議会は、教皇フランシスコの広島・長崎での「核兵器は非道徳であり、これに反対する」「核兵器廃絶は、単なる理想ではなく、明確な政治目標である」との発言を支持し、「米国は非核化・軍縮の先頭に立つべきである」と政府に働きかけていくとされる。

近年の教皇の核兵器廃止・軍縮への積極的な発言には、すでに昨年、カナダとドイツの司教団から支持の声明が出されている。両国とも従来、米国やNATOとの関係において核抑止政策に甘んじてきたのだが、教皇の姿勢に促され、

以前の態度を改めると表明している。それは、同じく米国の「核の傘」のもとにある日本のカトリック教会の立場にとっても参考になろう。

カナダ司教団の核兵器についての声明

この声明は、2019年9月26日、国連の核兵器廃絶国際デー総会で発表された。

それはまず、核戦争のリスクが高まっているとの現状分析から始まる。2006年以降の北朝鮮の核実験、米国の2018年5月のイランとの核合意破棄、そして昨年8月の米国とロシアは中距離ミサイル条約（INF）破棄などが続いている。核大国は核兵器の小型化など近代化を開始している。地球上にいまだに1万4千発以上の核兵器を保有する9カ国は、核拡散防止条約（NPT）で謳われている「核兵器廃絶に向けた誠実な交渉を追求する」との法的義務も回避している。

こうした状況に対して、教皇フランシスコは、もはや核エスカレーションは、道徳的に受け入れられないとの発言をさまざまな機会に行っている。「核抑止力と相互に保証された破壊の脅威は、友愛と平和的共存の倫理の基礎となることはできません」（2014年11月10日、核兵器の人的影響に関するウィーン会議へのメッセージ）など。そしてバチカン市国は、2017年7月に国連で採択された核兵器禁止条約に、9月20日に最初に署名した。さらにそれを受けて、同年11月には、バチカンで国際会議「核兵器のない世界と統合的軍縮への展望」が開催されたが、日本からの参加者も多かったこの会議での教皇の発言は、今回の訪日メッセージにつながっているだろう。

「核兵器は見せかけの安全保障を生み出すだけです。…核兵器の使用による破壊的な人道的・環境的な影響を心から懸念します。…（核兵器の）偶発的爆発の危険性を考慮すれば、核兵器の使用と威嚇のみならず、その保有そのものも断固として非難されなければなりません。この点で極めて重要なのは、広島と長崎の被爆者、ならびに核実験の被害者の証言である、彼らの預言的な声が、次世代への警告として役立つよ

う願っています」。

カトリック教会としては、1963年の教皇聖ヨハネ二十三世回勅『地上の平和』で世界に戦争と核抑止政策の放棄を求めて以来、後続の教皇たちも一貫して邪悪な戦争手段の廃止を求めてきた。それは第二バチカン公会議の宣言からも支持される。「(核)軍拡競争は、人類にとって全く危険なわなであり、貧しい人々を耐え難いほど傷つけるものです」(『現代世界憲章』81項)。

しかしながら、冷戦中、バチカンは、核の傘のもとにある国々とともに、軍縮措置につながることを条件として、核抑止戦略に限定的承認を与えていたのも確かである。

カナダのカトリックの司教たちも、その路線に乗ってきた。

ところが現在、世界情勢の変化に対するフランシスコ教皇の核兵器問題についての強い非難を受けて、立場を変えた。カナダの司教団は、この声明において次のように言う。

「私たちの国のすべてのカトリック司教を代表して、私たちはフランシスコ教皇の核兵器に対する強い非難を全面的に支持し発言します」。「我々は、核兵器の禁止に関する条約に署名するようカナダ政府に特別に訴えます」。「さらに、私たちはカナダ政府に、NATOを核兵器禁止条約に適合させる努力を継続するよう要請します」。

ドイツカトリック正義と平和委員会立場表明「核兵器廃止の開始としての核兵器法的無効化」^{*3}

ドイツのカトリック正義と平和委員会の声明も、現在の世界は新しい核軍拡競争によって極度の危険状態にあるとの警告から始まっている。ドイツは、核抑止は不可欠な戦略であり続けると宣言しているNATOの主要な加盟国であり、米国とも同盟関係にある。

ドイツのカトリック司教団は、こうした状況に迎合して、戦争を防ぐために役立つという条件下でのみ、核抑止戦略は受け入れ可能だと表明してきた。

しかしながら、今回、ドイツ正義と平和委員会は、核抑止戦略についての評価を再検討し、

特に、核抑止の論理的矛盾をくわしく検討した。すなわち、①敵への恐怖と疑心暗鬼に基づく抑止システムは、常に乗り越えられない不安定性を伴う。②抑止政策は、誰も望まない戦争を準備することによって、戦争を防ぐことを意図するという論理矛盾を抱えている。③民間人に被害を与えない核兵器が可能だとされるが、それは日本での原爆被害などの核の使用経験から幻想にすぎない。④核抑止力は、戦争を防ぐためにのみ限定的に使用されうるとも言われるが、そのような経験を人類はもっておらず、幻想にすぎない。結局、核抑止政策は「壮大なブラフ(虚構)」であり、誤った安心感しか生み出さないとされる。

その結果、ドイツ・カトリック正義と平和委員会としてはこの度、核抑止の概念は「もはや倫理的に正当化され得ず、核兵器は国際法の下で非合法化されなければならないというバチカンと教皇フランシスの見解を支持する」と態度決定した。

平和政策の基盤は、教皇ヨハネ二十三世以来カトリック教会がくり返し言う通り、国家間の信頼でしかない。それゆえ、最初のステップは核兵器を禁止し、それから核兵器を実際に世界から排除するために、決意と忍耐で、国連やカトリック教会、各国は核大国やNATOなどと武器管理と軍縮措置を交渉しなければならない。

最後に「今日の多極世界の主要な大国としての真の偉大さは、自分の利益を超えて、人類の福祉を政策の指針とする能力にあります」と言われるが、これはまさに被爆国であり、平和憲法を奉じる日本にこそ言われねばならない言葉であろう。

*1 Bp. David J. Malloy, Chairman of the U.S. Conference of Catholic Bishops' Committee on International Justice and Peace, 25 November 2019: *Statement from U.S. Bishops' Chairman of International Justice and Peace Committee on Nuclear Weapons*, Washington.

*2 Canadian Conference of Catholic Bishops, 2019: *Statement on Nuclear Weapons*, Ottawa.

*3 the German Commission for Justice and Peace, June 2019: *Outlawing Nuclear Weapons as the Start of Nuclear Disarmament*, Berlin.

プロテスタントから見た教皇フランシスコ

■ 福嶋 揚 (神学者)

私はプロテスタント教会に所属し、神学や哲学を研究している一般信徒の学者です。

先日の教皇フランシスコ来日によって、教派の差異を超えたキリスト教の原点を思い出させられました。その原点とは言うまでもなくナザレのイエスです。そのことについて書いてみたいと思います。

教皇フランシスコは第三ミレニアムを切り拓く教皇と言ってよいほど、キリスト教の新時代を画する存在ではないかと評価されています。彼は前教皇ベネディクト十六世まで続いていたカトリック教会のあり方を大きく変革しつつあります。さらにキリスト教の枠組みを超えて、地球全体の問題に向かおうとしています。

キリスト教が宗教組織として存続するかどうかよりも、地球という「ともに暮らす家」の滅亡の危機こそが差し迫った問題だと言わねばなりません。一宗教が単独でこの未曾有の危機に対応することは不可能ですから、外部の人々と幅広く連携しなければなりません。教皇フランシスコも『ラウダート・シ』において多くの学者の知見を取り入れながら、地球上で起きている混とんとした危機を把握しようとしています。

では今具体的に、どのような危機が私たちに迫っているのでしょうか。例えば森林破壊によって、人類は「地球の肺」を急激に失いつつあります。二酸化炭素や他の温室効果ガスによって気温上昇、気候変動が引き起こされ、膨大な被害と難民を生み出しています。耕作可能だった土地の多くが失われ、地表の砂漠化が進んでいます。大量の新しい化学物質が空気、土地、水へと放出されています。長期間にわたって放射線を発する核廃棄物が増え続け、拡散されています。

その一方で、地球が長大な年月をかけて蓄積してきた資源—例えば石油、石炭、天然ガスのような化石燃料や、希少な鉱物資源—が、地球

が蓄積してきた速度を遥かに上回るスピードで蕩尽されつつあります。大量の植物と動物の種が消滅していきます。今や「六度目の大量絶滅」の時代だと言われるほどです。

このような生態系の破壊と同時に、人間のあいだでも略奪が激化しています。ますます少数の者に富が集中し、ますます多くの者が中間層から貧困層へと転落していきます。多くの国々で独裁政治が台頭して民主主義が不可能になりつつあります。また新しい政治体制を形成できないために内戦が多発しています。資源や食料が枯渇することによって戦争の危険が高まっています。

このような混沌とした危機の原因を突きつめてゆくと、それは第一に終わりのなき経済成長を求める資本主義経済、第二に資本からの税収によって存立する国家制度、つまり資本と国家という二つの権力が引き起こしている複合的な危機であることが見えてきます。

まず資本主義は、マネーを得るために地球を可能な限り商品化しようとする経済活動です。次に国家は、暴力（軍事力）を独占することによって自らを維持し正当化しようとする仕組みです。マネーの力と軍事力はどちらも果てしなく増大し続ける虚無的な力です。この二つの力に服従する以外の生き方を失った現代人は、《偶像崇拜》者以外の何者でもないでしょう。そもそも聖書によれば、偶像崇拜とは人間が自らの手で作り出したものに命を捧げてしまうことですから。

そのような偶像崇拜から自らを解放しなければ生き延びられないところまで人類は来てしまいました。つまり資本と国家に対抗し、それを変革するような第三の力が必要だということです。このことを哲学者の柄谷行人氏が詳しく論じています。マネーの力とも武力（暴力）とも異なる力とは、人に見返りを求めずに与えるこ

と、人を自由な存在として扱うこと、人を愛する純粹贈与の力です。それは一見すると無防備で弱々しいのですが、実はそれだけが真の意味で人間を解放して変革し、既存の資本主義や国家制度を超えた新しい社会を作り出す創造的な力だということができます。そしてそのような「力」(ローマ1.16)を宣べ伝えてきたのがキリスト教であり、その力の源はナザレのイエスに他なりません。

イエスが説いたのは「神の国」—真の解放、正義、愛を実現するラディカルな世界変革—であって、新しい宗教的組織を作ることではありませんでした。イエスにとって重要なことは規律や教義への服従ではなく、「公正、慈悲、誠実」(マタイ23.23)を実践することでした。

イエスは殺されて、神の国が来なかったために、その教えを引き継ぐ教会が誕生しました。イエスの死後、その教えと生涯は異なった状況や文化を通して解釈され、一つの世界宗教となりました。それはローマ司教を頂点にして、古代、中世、近代にかけて巨大で不平等なヒエラルキーを作り出してゆきました。そのような権力的な階層秩序はナザレのイエスから遠く隔たってしまったように見えます。キリスト教が信頼や活力を取り戻すためには、カトリックであろうとプロテスタントであろうと、イエスの原点に立ち返る以外に道はありません。そして現教皇フランシスコがやっていることは、まさにその原点回帰ではないかと思うのです。

では教皇は具体的にそれをどのように行っているのでしょうか。イエスによれば、飢えている者、乾いている者、よそ者、病気の者、牢に入れられている者においてこそ神が現われます(マタイ25.45)。教皇はまさにそのような人々に仕えようとしています。その際、貧困問題は社会正義によってこそ解決されること、そのためにはキリスト教徒の政治参加が不可欠であり、政治は共通善を求める「慈善の最高の形の一つ」だとも語っています^{*1}。

また教皇フランシスコは中世アッシジのフランシスコを大きな靈感の源として、イエスに回

帰しようとしています。二人のフランシスコに共通していることは、権威主義化した教会の再建、教会の外に出て行って他者—他宗教者、無神論者、社会の周辺におかれた人々—と出会う姿勢、さらに被造物を兄弟姉妹と呼んで慈しむエコロジカルな霊性です。

現教皇はトップダウン式に真理を告げ知らせるのではなく、正解がない最も不確実で過酷な状況へ身を乗り出していきます。学者的な態度ではなく、様々な当事者の目線に立って、心を開いて人々に接します。現代における「無関心のグローバル化」を批判すると同時に「泣く能力」の回復を訴えていることも重要です^{*2}。

教皇は以前「今日革命的でないキリスト者はキリスト者ではない」と発言したことがあります^{*3}。彼はまさにナザレのイエスが行った愛と解放の革命を地球全土に広げようとしています。このことが教派の差異を超えて、宗教の差異や有無を超えて、世界的な反響を呼び起こしています。

もっとも私たち現代人は、この地球上で万策を尽くしても、資本主義と国家権力の暴走がもたらした地球の崩壊を阻止することが間に合わない状態にまで来てしまったかもしれません。気候変動は容易に止まらないでしょう。地球生態系と文明社会は連鎖的に崩壊し、今後何10年、何100年と大きな混乱が続くでしょう。

けれどもそのような大崩壊の時代、闇夜になってはじめて星が瞬くように、ナザレのイエスの教えと道こそが共に生き延びる細い径であることが明らかになるのではないのでしょうか。教皇フランシスコが身をもって体現しているキリスト教の役割も、まさにそのような闇夜の灯となることではないかと思えます。

*1 教皇が学生たちのグループに語った言葉。以下に引用されている。Leonardo Boff, *Francis of Rome and Francis of Assisi, A New Springtime for the Church*, Orbis Books 2014, p.89.

*2 2013年7月8日、地中海のランペドゥーサ島で、アフリカからの難民を追悼するミサにおいて語った言葉。

*3 2013年6月17日ローマの教区会議での言葉。

フランシスコ教皇陛下

私は大石又七です。元マグロ漁船の漁師でした。

フランシスコ教皇に知っていただきたいことがあります、手紙を差し上げますことをおゆるしてください。私は7年前に脳出血を患い、その後遺症で右半身が麻痺してしまい、ペンをとることができません。この手紙は、私が信頼する人に代筆を託しました。

私は1954年にアメリカがおこなった水爆実験による被ばく者です。

私はいま85歳ですが、私の同僚たちはその半分にも満たない四十代、五十代の働き盛りでこの世を去っていきました。その仲間たちの無念を思うと、命が尽きるまで私が体験したことを訴えなくてはならないと思っています。

私と仲間たちは、水爆実験による放射性降下物「死の灰」を浴び、急性放射能症となり、放射線による火傷や脱毛、白血球の減少、肝機能障害、無精子状態などに見舞われました。半年後には無線長の久保山愛吉さんが亡くなりました。遺体を解剖すると骨や臓器から放射性物質がみつかりました。

私の第一子は、死産で畸形児でした。

このことを長らく、誰にも言えずにいました。自分のせいで家族に影響が出るのではと、仲間の誰しもが不安に思っていたからです。皆そうした不安を口にするこなく、病気を抱えたまま黙って死んでいきました。しかし誰もが、その原因が核兵器だと知っています。

私は核兵器、放射能、原発事故の恐ろしさについて、30年間に700回以上お話ししてきました。身をもってその恐怖にさらされた私が話さなければならないと感じているからです。核実験場となったマーシャルの被ばく者とも交流しましたし、NPT再検討会議が行われたニューヨークでも訴えましたが、ビキニ事件を知らない人があまりにも多く、事件当時に生きていた人でも、どんどん忘れていきます。しかし、これは忘れてはいけない事件なのです。

半身麻痺のみならず、私の体はたくさんの病気を抱え、何十種類もの薬を飲まなければなりません。しかし、たくさんの人が真剣に考えてくれるよう、放射能被害の恐ろしさについて学んでくれるよう、命を懸けて訴え続けています。

広島と長崎の被ばく者、私たち核実験による被ばく者、そしていままた、福島第一原子力発電所の事故で、被害者が出てしまいました。なんの罪もない人びとが先祖代々の大切な土地を手離し、見えない放射能や内部被ばくに脅えながら暮らしています。事故から8年経ったいまも、被ばくへの治療は進んでおらず、子どもたちの甲状腺の病気もたくさん出ていると聞きます。ビキニ事件と同様、被害は過少評価され、大事なところはみな、責任逃れで隠されているように思えてなりません。

フランシスコ教皇陛下。

核兵器禁止条約は世界のヒバクシャの願いです。これ以上核兵器や放射能による被害者を出してはいけません。ビキニ事件は核兵器反対運動の原点です。これは遠い過去に終わったことではなく、未来の命に関わる事件です。核兵器のない未来のために、世界に向けて平和への願いを発信してください。

元第五福竜丸乗組員
大石又七

左頁（p. 6）は、元第五福竜丸乗組員の大石又七さんが、教皇フランシスコの訪日にあたり、司教団を通して教皇に渡した手紙です。この手紙が書かれた背景について、都立第五福竜丸展示館学芸員の市田真理さんに解説をお願いしました。

アメリカが、マーシャル諸島ビキニ環礁で最初の核実験を行ったのは、1946年7月のことで、広島・長崎への原爆投下からわずか11か月のことでした。日本では終わったと思われていた戦争ですが、核を用いた戦争の準備が着々と進められ、核軍拡競争の幕開けともなったのでした。

1954年3月1日、ビキニ環礁で行われた水爆実験「ブラボー」は広島原爆の1000倍、15メガトンの威力で爆発しました。静岡県焼津のマグロ漁船・第五福竜丸は、公海上にアメリカが定めた危険区域の外、実験場からは160km離れた海域で操業していたにも関わらず、死の灰（フォールアウト／放射能降下物）を浴びて被ばくしました。23人の乗組員の外部被ばくは現在の単位で2000～3000ミリシーベルトだったと推定されています。広島の爆心から800mに相当します。乗組員たちは放射線による皮膚損傷（β線火傷）、脱毛などの急性症状を発症しながら帰港しました。

この年だけでもアメリカは6回の核実験を行い、現在わかっているだけでも少なくとも延べ1000隻の漁船の漁獲物から放射性物質が検出され、吹き上げられた死の灰は雨に混じって、日本各地に降り注ぎました。とりわけ子どもをもつ母たちの不安は募り、核実験に反対を表明する「原水爆禁止署名運動」として各地で取り組まれました。当時の日本の人口8000万人のうち、3200万人以上が署名しました。アメリカは長らく広島・長崎の被ばくの実相が世界に伝わることを抑えてきました。日本の中でも知らない人がたくさんいたのです。ビキニ事件による被害は、それまで語られてこなかった広島・長崎の原爆被害に、人々の目を向けさせることになり、第一回目の原水爆禁止世界大会では、原爆被ば

く者の救援が叫ばれるようになりました。

しかし日米政府の政治決着により、第五福竜丸乗組員の被害は「終わったこと」とされ、被ばくによる差別と、見舞金をもらったことで嫉妬され、乗組員たちは沈黙していきました。その一人、大石又七さんもそうでした。差別から逃れるため、ふるさとを捨て、東京で魚とも海とも漁師とも関係のない仕事に就かざるを得なかったのです。彼は父を亡くして、14歳で漁師にならざるを得なかったにもかかわらず。

黙っていれば、人びとは忘れ、核実験についても騒がなくなっていったかもしれません。ところが大石さんはある日、自らの体験を語り始めました。世界中で核の危機が叫ばれた80年代、中学生たちから尋ねられたからでした。語り始めてから現在に至る30年間、彼は命を削るようにして、世界に警告を発しています。ニューヨークでもマーシャルでも、核兵器反対を訴えてきました。言ってもわかってもらえない、終わったことだと、語ることをあきらめて、40代、50代の若さで亡くなっていった仲間の分も、自分は死ぬまで闘い続けると言っています。

大石さんは現在85歳。20年前に肝臓ガンの手術、7年前に脳出血で倒れ、半身麻痺の後遺症を負っています。歩くことは困難となり、2019年の6月から老人ホームに入居していますが、それでも真実を伝えたいという熱い思いを絶やすことはありません。

「死の灰」をうけたのは日本だけではありません。実験場となったビキニ環礁から180kmのロンゲラップ環礁やウトリック環礁の人びともまた、第五福竜丸と同じような症状に見舞われました。成層圏まで届いた「死の灰」は世界中に拡散しました。多くの漁師たちがいまなお、自分の内部被ばくの不安に脅えて過ごしています。大石さんは、こうした核の被害と反対運動の原点となった、このビキニ事件のことを忘れてほしくないと願っています。

日本・韓国パックス・クリスティ合同平和祈禱会 (11月25日、浦上教会信徒会館)

■丸尾育朗 (カトリック長崎大司教区福音化推進部・平和推進委員会)

フランシスコ教皇様が長崎を訪問され、11月24日、午前中雷鳴とどろく寒い雨の中、原爆落下中心地碑に献花をし、バチカンから持参したろうそくに点火をしました。その火を手渡したのは、信徒の被ばく者と、6月バチカンを訪問し、直接教皇様に日本訪問のお願いをした、長崎の高校生平和大使の二人でした。爆心地から教皇様は、全世界に向けて「核兵器廃絶」のために、各国の政治指導者だけでなく市民が一致団結して行動を起こすよう訴えました。午後は一転して雲一つない暖かい日差しの中、教皇ミサが行われました。

この教皇ミサにあずかるため、韓国から被ばく者を含め34名の方が来崎するので、長崎の信徒、特に被ばく者の方々と合同の祈禱会を行ってほしいとのお願いがあり、会場準備や長崎の人たちを集めればいいのか、と安易に考え引き受け、25日午前中、「日本・韓国パックス・クリスティ合同平和祈禱会」を浦上教会信徒会館にて開催する事になりました。

しかし、韓国と日本、全く言語の違う国どうしであり、何をすることも、韓国語の通訳が出来る方が必要でした。私は、日本語どころか、長崎弁しかしゃべれない人間で、よくも了解したもんだと思ひながら、溝上由美子さん（浦上教会信徒）と、溝上さんから紹介してもらった木村秀人さんにすべて翻訳をお願いしました。木村さんは独学で韓国語を学び、私が活動に参加している在韓被ばく者支援の運動や、高校生一万人署名活動・高校生平和大使の活動を通訳として支えてくださっている方です。この二人が、送られてきた資料を、つぎつぎに一夜のうちに翻訳し印刷してくださいました。木村さんは、被ばく者の方々が23日、韓国から入国する



際、入国管理官に足止めをされ、入国に5時間もかかった時にも迎えに行ってくくださったのです。

25日の会場は浦上教会の信徒会館、日本の参加者には、祈禱会の資料を一つにまとめることが出来ず、進行表と翻訳が済んだ部分の資料、前夜に翻訳した祈り、聖歌集、の三つの資料を手渡しました。私が進行役をさせていただきましたが、通訳のお二人で、ここは韓国、ここは日本、韓国語の祈りは、この資料の何番目、と交通整理をしながら進めていただきました。

当日の出席者は、韓国から「韓国パックス・クリスティ」、「被ばく者・被ばく二世」・「平和と統一を開く人々（略称：ピョントンサ）」という平和団体のメンバー、合計32名、日本からは被ばく者・被ばく二世を含め27名の方の参加でした。言語と、国を越えての交流、その運営の難しさを実感しました。国外に行くたびに、語学の必要を感じながらも、通訳付きの海外交流しか出来ませんでした。そこでは味わえない、交流をさせていただきました。韓国の皆様、そして、長崎の被ばく者の皆様、長崎だけでなく宮崎や、東京からの参加、大変有難うございました。意義ある国際交流になったことに感謝です。

信仰の火を焚きつけられて

——教皇フランシスコと若者たちの出会いの断章——

■ 富田 聡 (上智大学神学研究科学生)

ここに、若者に語る言葉を知っている人がいる。彼らの痛み、苦しみ、憧れを知り、誰をも裁くことなく、ただじっと聴く人がいる。教皇フランシスコ、人生の歩みを知る人である。この人は凄い人だ、この人は本物だ。これは理屈ではなく、直感で分かることだ。この人の服にさえ触れることが出来たら、きっと私の人生は変わる。

ある若者が私に言った。「きっと2000年前も同じことが起きたんだよ。キリストが来たとき、みんなこうなったんだよ。だって、聖書に書いてあるとおりにじゃんこれ。パパ様来て、みんなイエスに群がる群衆と同じことしているよ」。その通りだと思った。あの当時イエスを慕ったのが心の貧しい民だったように、今も教皇の周りに集まったのは様々な悩みを抱える心貧しき若者たちである。

キリスト教は神が私たちの内に宿ることを信じる。若者たちの教皇に対するこの熱い反応は、教皇の中に現存するキリストを見るところから来ている。教皇と出会い、そのたたずまいに触れた記憶が、自分の中にも現存するイエスの記憶と共鳴する。だから、彼らは目覚める。「キリスト者であって本当に良かった」「私たちは決して独りじゃない」。程度の差はあれ、皆これと似たような印象を抱いたことは事実である。

今若者たちは燃えている。まるで何かに焚きつけられたかのように燃えている。「教皇が来て、『ああよかった』で終わることほど怖いものはないよね」「この盛り上がりをもとめか次につなげないと、本当にヤバイ」「教皇が来たっていうのに、それにこんなに私たちのために時間を割いてくれたのに、なんでみんなもっと盛大に迎えなかったの？こんな湿気た雰囲気でもいいわけ？」。火のついた若者たちは、もう反省会を始めている。私は、この熱い彼らに常々こ

う言っている。「これが良くも悪くも日本の教会のフルパワーだよ。ここから一緒に始めよう」。

どうか、これを読む皆さんに願う。若者たちと友だちになって欲しい。彼らは敬意を欠いているかもしれないし、時間にルーズで常識をわきまえていないかもしれない。スマホばかりいじっていて、だらしなく見えるかもしれない。でもゆるしてやって欲しいのだ。イエスのまなざしは、そんなところを見てはいないのだから。彼らは必死に生きている。家庭が崩壊した中で生き延びてきた。親からの愛を十分に受けられずに、死ぬほど寂しい心を押殺して生きてきた。英才教育の中で、幼い時から大きなストレスを抱えて、無償の愛を信じられなくなりそうになりながら生きてきた。傷だらけで、不器用に、それでも彼らは生きてきたのである。「ねえ、私たちって実は生きてるだけで褒められるに値するよね。だから、富田さんも褒めてあげるね。よく生きてたね。えらいえらい」。思わず涙が出そうになる。傷だらけの彼らは、本物の福音を知っている。

今後若者たちが何をしだすかは誰にも分からない。ただ彼らが何かを始めようとしたとき、それを制限し、コントロールしようとする側には回りたくないものだ。むしろ彼らの危なっかしい歩みを支えてやりたい。私は教会のために彼らを用いるのではなく、教会に彼らの居場所を作る者でありたいと思う。このように貧しさを知る者、不条理の痛みを知る者の声こそが、全世界に響かなければならないのだから。

日本の教会は、今回教皇フランシスコの来日という、教会を活性化させるための最終兵器を使ってしまった。もう後はないのだ。これから先の50年は、私たちが踏ん張らなければならない。皆すでにその覚悟は十分に出来ている。

戦をくり返さないために！

■ 伊佐真次（沖縄県高江「ヘリパッドいらない」住民の会）

2019年11月末、89歳の父親が他界した。葬儀は地元の公民館で行われ、毎度のことだが故人の関係者は食事の準備もできないだろうとご婦人方は食事を朝から用意してくれ、若者は交通整理や受付は当たり前のことと率先して引き受けてくれる。火葬場や葬祭場での告別式が主流になっている昨今、地元の公民館での告別式に参列者からは「地域の皆さんとの関わりがまだしっかりとつながっていていいね、うちもそうしたい」との感想があった。

特定の宗教はないので葬儀にはお経もミサもなく静かな曲が式場に流れるだけ、参列者それぞれの想いで生前の姿を思い返すことができれば幸いと思った。地獄のような戦争の体験から、生涯反戦を貫き、戦争の悲惨さや愚かさを伝える生き方は子孫の手本になった。歳のわりには背筋も伸び、歩けるうちは、米軍基地強化につながる北部訓練場のヘリパッド建設反対の座り込みにも顔を出していた。土曜日の座り込みには昼食のおにぎりやクッキーなど持参したシスターもよく参加して、「ご一緒にどうですか」とすすめられても、人前で食事を取ることは減多になかった。特にあれこれ話すこともなかったが、現場にいる人々に「戦争は絶対してはならない」と伝える言葉は体験者ならではの説得力を持ち、大きな存在だったと思う。生き地獄の様相は他人に話せないこともあっただろう。それこそ墓場に持って行ったのではないか。伝えたいことを伝えられないとは戦争とは残酷なものだ。

私たちの暮らす地は毎日、戦争のための訓練が行われている。空は大型輸送ヘリ、攻撃

ヘリ、救難ヘリ、オスプレイなどが我が物顔で飛び交い、住宅の上をゴウ音を響かせ、壁を揺らし夜の11時近くまでの訓練も珍しくない。時折、発砲音が響き銃撃訓練が行われている。兵士は何を考え訓練に参加しているのか。訓練を終えた兵士は軍用トラックに乗せられ別の基地まで帰るが、辛く苦しい訓練から解放され達成感があるのか移動中のトラックから奇声を上げる者がいた。荷台の兵士たちは明らかに若者で、人に銃を向けるようになるには極限まで追い込まなければできないのではないかと。テレビや映画で入隊の動機を「愛国心」と答える映像を振りまき、国を守るには軍隊が必要なんだとすり込むことに成功しているのではないかと。

日本はどうだろう。軍隊を持たないとうたった憲法を忘れてしまったかのように軍備を拡張する自衛隊を南西諸島まで配備し、外国軍が戦後75年も居座り、さらに軍事費をもっとよこせと言われても反論もできず、買う必要のない戦闘機を爆買いしてしまいそうだ。いのちを育む海をつぶし、生物多様性に富む森を切り開く愚かな行為を繰り返す。福島原発事故は無かったかのように世界のアスリートを集めるオリンピックはどうなるのだろうか。あの時盛んに流していた「ただちに健康に影響はありません」という言葉は事実だ。「ただちに」は「もうそろそろ」なのか「もう影響がでてきている」なのかこの国は伝えない。都合の悪いことは保管義務があってもシュツレッダーに通してしまうこの国のままでは平和を作っていくと闘ってきた先輩たちが報われない。今変えなければ我々も戦のない世界を見ることもなく死んでいくのだ。



弱さのうちに深くつながる

■ 大口玲子 (歌人)

教皇訪日行事で最も印象深かったのは、東京カテドラルでの「青年との集い」だった。3人の青年のスピーチに答える形で話された教皇フランシスコの講話は、あきらかに「平等」ではなく、最もつらく苦しい立場から自分の経験を分かち合った一人の青年のために特に長い時間を割き、時には原稿にない言葉を加えながら、ユーモアと熱意をもって励ますものだった。YouTube配信を一緒に見た11歳の息子は、日本の小学校で徹底されているような「平等」とは違う価値観で「何を大切にすべきか」がはっきりと示されたことに驚き、私も胸が熱くなった。

同じ日、東京ドームでの教皇ミサの説教でも日本の若者たちについて次のように触れられた。

今朝の青年との集いで、社会的に孤立している人が少なくないこと、いのちの意味が分からず、自分の存在の意味を見いだせず、社会の隅にいる人が、決して少なくないことに気づかされました。家庭、学校、共同体は一人ひとりが支え合い、また、他者を支える場であるべきなのに、利益と効率を追い求める過剰な競争によって、ますます損なわれています。多くの人が、当惑し不安を感じています。過剰な要求や、平和と安定を奪う数々の不安によって打ちのめされているのです。

教皇のこの鋭い指摘に、短歌の世界でもここ数年、まさに「打ちのめされている」若者たちが、その当惑や不安を率直に表現するようになってきていることを思わずにはいられなかった。

・たぶん親の収入超せない僕たちがペットボトルを補充してゆく

山田航『さよならバグ・チルドレン』2012

・水筒の中身は誰も知らなくて三階女子トイレの水を飲む

鳥居『キリンの子』2016

・頭を下げて頭を下げて牛丼を食べて頭を下げ

て暮れゆく

萩原慎一郎『滑走路』2017

・職もたぬ子に老い深き親の話ニュースなどでも見たことがある

佐伯裕子『感傷生活』2018

働くことの意味も喜びも見いだせず、経済的自立も危うい「僕たち」の世代。家族を失い、支えられる場を持たずにホームレスを経験した少女は「水筒の中身」を学校で調達し、教室では何事もないかのように振る舞っている。中学高校で長期間いじめを体験し、非正規雇用で「頭を下げ」続けて働く日々を歌った青年は、精神の不調で歌集出版直前に自死した。最後の一首だけは息子の「ひきこもり」を詠む母の歌。「職もたぬ子」と「老い深き親」は他人事でなく、わが家のことでもあったと発見する歌である。

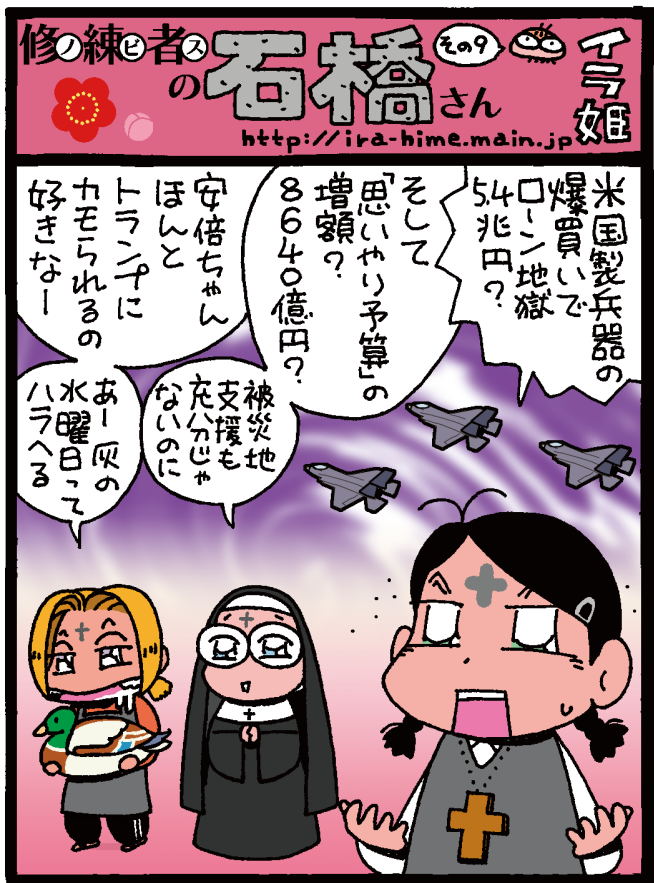
ここにきて私もやっと、自分自身が打ちのめされて弱い存在であることに思いが及ぶ。昨年8月に夫が重度の鬱病と診断されて入院、9月に転居、転校した息子は10月から小学校に行かなくなった。私はどこかで、自分はまだ誰かから「頭を下げ」られたり苦しむ若者を支援する側にいると思っていたのだろう。実際には、夫の同僚に頭を下げ、付き添った病院で頭を下げ、小学校の相談室に呼び出されて頭を下げていたのだった。打ちのめされ頭を下げ続けて本当に弱くなった私の目に初めて、日本の若者たちの弱さとそこに向けられた教皇フランシスコの眼差しの深さが見えてきたのかもしれない。

息子と共に長崎での教皇ミサにあずかった翌日、浦上教会で在韓被ばく者との祈りの集いに参加した。平日の昼間、大人ばかりの参加者の中でたったひとりの小学生だった息子に、韓国から来た被ばく者と支援者の多くの人が目をとめ、優しい眼差しと笑顔を向けてくれた。弱くあることで深くつながることができると思ったこの時こそが、私と息子にとって教皇来日の最も大きな恵みだったと思っている。

特集 教皇フランシスコ訪日と核廃絶
—「あなたのうちに平和があるように」

- 1 教皇フランシスコ核問題発言への反響 光延一郎
- 4 プロテスタントから見た教皇フランシスコ 福嶋 揚
- 6 元第五福竜丸乗組員 大石又七さんの手紙 解説・市田真理
- 8 日本・韓国パックス・クリスティ合同平和祈禱会 丸尾育朗
- 9 信仰の火を焚きつけられて
—教皇フランシスコと若者たちの出会いの断章— ... 富田 聡
- 10 (連載第3回) 高江・新月の森から...
戦をくり返さないために! 伊佐真次
- 11 (連載第3回) シロツメクサの花かんむり
弱さのうちに深くつながる 大口玲子
- 12 まんが「修練者の石橋さん」

表紙写真 2019年11月24日 西坂日本二十六聖人記念碑前でスピーチする
教皇フランシスコ ©CBCJ



各地からの報告

正義と平和 えとせとら...

事務局

事務局から

1月18日、さいたま教区大宮教会を会場に、日本カトリック正義と平和協議会改憲対策部会の主催、トーク集会「憲法9条をそだてる」を開催しました。登壇してくださったのは、憲法学が専門の青井未帆さん（学習院大学法科大学院）と、ピース9の会呼びかけ人松浦悟郎司教の二人。ピース9の会の協賛、さいたま教区、およびさいたま教区正義と平和協議会ロバの会の協力を得、みぞれ混じりのあいにくの天気の下、同教区の皆さんを中心に90人に及ぶ参加者がありました。自衛隊がついに中東に派遣され、9条改憲の危機がまた一歩進んだ2020年正月、「9条という条文を『あらゆる武力行使は、犯すべからざる悪』という倫理的側面から支えるのは、わたしたちキリスト者の使命」との投げかけに、会場の大宮教会聖堂は平和への希望で熱く湧きました。この講演会の記録は、2019年度正義と平和協議会で行った講演会の記録と併せ、JPブックレットvol.9に収録し、2020年春にはみなさまにお届けする予定です。



編集後記

オーストラリアでは9月から続く森林火災で1200ヘクタールが焼失、コアラやカンガルーの絶滅が危惧されている。海には私たちが日常廃棄する大量のプラスチックゴミが流れ込み、それらは現在、15000万トンにのぼると推定され、海の生態系に深刻な影響を及ぼしている。海鳥や亀、クジラ、アザラシがたくさんのプラゴミを胃につまらせて死に、海辺に打ち上げられている。気候変動もプラゴミ廃棄も、まさかこんなに深刻な問題になるとは、最初はだれも思わなかった。ちいさなペットボトルを大海に投げ捨てても、これくらいで心配するなんて神経質だと思っていた。

政府と東京2020組織委員会は、今回のオリンピックを「復興オリンピック」と位置付けた。3月26日、聖火リレーが、Jヴィレッジ（福島県楡葉町・広野町）からスタート、福島の復興が世界に宣言される。Jヴィレッジは、原発事故後、自衛隊ヘリや作業員の除染、作業員の原発入退管理施設として使われていた。2019年4月、オリンピックに先立ちスポーツ施設としての営業を再開、子どもたちもサッカーの試合などで利用を始めている。10月と12月、国際環境NGOグリーンピースによって、施設付近で高い放射線量（最高で毎時71μSv）が計測されているのだが。(h.)



発行日 2020年2月1日 (隔月発行)
編集発行 日本カトリック正義と平和協議会
〒135-8585 東京都江東区潮見2-10-10
TEL.03-5632-4444 FAX.03-5632-7920
E-mail jccjp@cbcj.catholic.jp

購読料 年 1,800円 (送料共)
郵便振替 00190-8-100347
加入者名 カトリック正義と平和協議会

<http://www.jccjp.org>